

華嚴經入法界品と南インドの地名について

彦 坂 周

華嚴經は初期大乘經典に属し、その成立年代は竜樹以前、即ち A.D. 2 世紀以前であるといわれている。そして華嚴經典の中でも、十地品と入法界品の成立は古く、初め独立した經典として存在していたともいわれている。華嚴經が中国に伝わると華嚴宗の所依の經典として華嚴學が大成され、韓国・日本においても、その哲学思想や教理の研究が連綿と行なわれてきた。この小論では、華嚴經入法界品が編纂された社会的地理的背景に焦点をおき、考察を進めていきたい。

華嚴經入法界品の編纂された社会的背景には、維摩經と同様商人階級の台頭による仏教の支持と、出家教団部派への批判が見られる。例えば、維摩經では仏の十大弟子と称される比丘が悉く在家の維摩居士にその無知を叱責されるが、入法界品では、富豪商人の子である善財童子が求道の途上、婆羅門、船師、香商等をも善知識として法を受けるのに、仏の大弟子声聞が仏の会座に在りながら聲の如く啞の如き扱いを受けているのなどはその最たるものであろう。そしてもう一つ重要な点はこの經典が初期大乘經典であるということである。即ち、入法界品には大乘の教説が釈尊の正統なる教法として承認されんとする意図がうかがわれる。このことは入法界品の構成の上によく表れている。入法界品の構成は、善財童子の善知識歴参に始まる前段階（本会）と、文殊が舎衛国逝多林の給孤獨園の大莊嚴堂から釈尊の許しを得て南方へ出立し、そこで文殊に教えを受けた善財童子が、順次善知識を歴参するという、入法界品の中心をなす部分（本会）からなっている。

ところで入法界品では、文殊菩薩が釈尊の舎衛国を離れ南方の福城に到り、そこで文殊は善財童子に会い、そして文殊の教えに従い善財童子は漸次南行して五十三の善知識を歴参するという形をとっているが、この南行は何を意味しているのであろうか。筆者はこの南行を大乘仏教が南インドに広がって行った跡付けではないかと考えるものである。既に筆者は、第二十八師親自在菩薩の住居補陀落山が南インド・タミル州の南端にあるポディール山であることを、タミル文献や実地調査によって立証した。そして興味深いことには、善財童子の歴参は第二十九

師が東方の空中より来るとなっており、第三十師が南方墮落鉢底城 (Dvāravātin) でそこが南端となっており、そこより南方は大海であるため、第三十一師以後は再び釈尊の教化された地である北インドの摩竭提国に戻っていることである。但ここで注意しなければならないことは、入法界品には多分にフィクション的要素があり、必ずしも全ての地名や位置が実際の地理と一致しているとは限らないことである。またこの經典の原典が梵文で書かれているため、地名も原名そのままではない場合が多いことを考慮する必要があるであろう。周知の如く、インドは言語のるつぼの国であり、北インドと南インドはアーリア系言語とドラヴィダ系言語に大別することができる。そして南インドの中でもタミル地方の地名には比較的タミル名が付けられていることが多いといえよう。さらに南インド・タミル地方に仏教が伝わったのはアショーカ王の時代、B.C. 3世紀シュリランカに仏教が伝えられたときであり、その後もシュリランカの上座仏教とは相互に交流があったことを念頭に置いておく必要がある。以上の諸点を考慮に入れた上で入法界品に出てくる地名について考察していくことにしよう。

今は紙面に制限があるので、ここでは数カ所の地名を選んで検討することにする。まず文殊がおのが住みかを離れ、漸次南行して到った処は福城または福生城と漢訳され、その梵名は *dhanyā-kara-nagara* といわれている。*dhanyākara* とは、富を貯えた、裕福な、幸福な、と言った意味であるが、それは商業の栄えた裕福な商人の町を表している。古代チョーラ王国の都カーヴェリパティナムはローマ帝国との海上交易によって栄えた国際貿易港で、その都の商人の繁栄の様子はタミルの古典、シャンガム文学で A.D. 2～3世紀の作とされるパティナペーライ (*Paṭṭinappālai*) によく描かれている。同詩128～36行には海上交易の様子が描かれており、輸出入の商品の荷にはチョーラ王国のシンボル虎の印が押捺されている。その都には仏教寺院と思われる白壁の寺（同50行 *ven kōvil*）が在り、そして商人の多くは仏教徒であったようである。彼等は殺生を嫌い偷盗をせず、天人によって守られている。美味な食事を料理して万人に施す。このような彼等の生活はあたかも涼しい木陰の下にいるようで、そこには悪の入る隙がなく限りない幸運が彼等にもたらされる（同199～224行）。少し時代は下るがタミル叙事詩シラッパディハーラムやマニメーハライにはこの都が国際貿易港としての黄金期が描かれており、富豪商人は王侯貴族よりも富を持っていた。主人公コーワランは豪商仏教徒の息子であった。そこには多くの仏教寺院も描写されているが、最近の発掘によっても仏教寺院遺蹟が発見されている。

これらのことから福城 (dhanyākara-nagara) とは古代チョーラ王国の都で国際貿易港であった Kāveripaṭṭṇam に比定できると考えられる。

次ぎの第二師徳雲 (Megha-śrī 吉祥雲) 比丘の住む勝楽 (Rāmavarānta) 国は福城より南方へ7日の行程で妙峯山とあるが、これは叙事詩ラーマーヤナにも登場する Rāmeśvara に比定するのではなかろうか。ラーマーヤナによれば、ラーマはランカ島に渡る前ここでシヴァリンを礼拝したと言われる。しかしタミル古典ジャンガム文学アハム詩第70には、古きパーンディヤ王国の Kotiturai (Rāmeśvara) の海岸はかつて潮騒がバンヤン樹の如く高鳴っていたが、勇敢なるラーマの祈禱によってこの騒々しい地も静寂になったとあり、その地名の由緒が少し異なっている。

第三師海雲 (Sāgaramegha) 比丘の住む海門 (Sāgara-mukha) 国とは大河が海に注ぎ込む処で、Kāveripaṭṭṇam は Kaveri 河の河口であるところから、別名を Kāveripūmpaṭṭṇam とか Pūmpukār と呼ばれるが、ここでは Tambaraparni (Tāmrāparni) 河の河口でローマ時代から真珠の産地として知られていた Korukai (Tutikorin) に比定できであろう。

その他、第四師の楞伽道 (Laṅkapatha) 海岸 (Sāgara-tira) 聚落はシェリランカ島に渡る海港を指し、第五師の達達比叱 (Dramidapaṭṭana) 国は pattana とあるところからも知られるようにタミル地方の海に面した処を指し、第八師の海潮処 (Samudra-vetādin), 第九師の海潮処那羅素 (Sāmudra-nalāyus) 国、第十四師の海住城 (Samudra-pratiṣṭhāṇa 海別住城) 等海辺に面した地名が多数出てくる。これらの地名が現在のどの地名に比定するかは今後の課題であるが、今ここで推測できることは南インドの海辺に面した交易による新興商人の栄えたところで、そこでは商人によって仏教、特に大乘の在家仏教が信奉されつつ在った処ではなかろうか。

このように観るとき、華嚴經入法界品における善財童子の南行は南インドの新興商業都市に大乘仏教が広まっていた跡付けを象徴的に表わしているのではなかろうか。そしてこの大乘の教法を正統づけるためにインド最南端まで行った後、再び仏教の聖地北インドに戻っているのである。

〈キーワード〉 華嚴經入法界品、南インドの地名、善財の南行と大乘南漸

(学校法人ルネス学園・総合科学研究所教授,
インド・マドラス・アジア文化研究所所長)